2 月第 4 週の礼拝説教

■日　時：2024 年 2 月 25 日（日）10：30～11：30　受難節第 2 主日礼拝
■説　教：　保科けい子牧師
■聖　書：新約：エフェソの信徒への手紙 5 章 6～14 節（新約 p357～358）
■説教題：「　光の子として歩む　」
■讃美歌：296「　いのちのいのちよ、死の死なる主よ、　」
　　502「　光のある間に　歩くならば　」

私共の立川教会では、毎週水曜日に聖書研究・祈祷会を行っています。今年は、2月14日が教会暦では灰の水曜日でしたので、その日からイースターの前日の3月30日（土）までが受難節となります。その間の水曜日は7日ありますので、マタイによる福音書26章を７回に分けて読むことにしました。先週の2月21日はマタイによる福音書26章の14節から25節でした。イスカリオテのユダが主イエスを裏切ろうと企て、主イエスと弟子たちの過越の食事の時に、それを主イエスから指摘される場面です。4つの福音書すべてに描かれていますが、私が特に忘れられないヨハネによる福音書13章に記されている最後の晩餐の様子を丁寧に読みながら、マタイによる福音書26章と対比させてその場面に思いを馳せました。おそらく食卓の上には灯りが置かれ、弟子たちは主イエスを中心に和やかに会話をしながら、過越の特別の食事をしていたことでしょう。ヨハネによる福音書13章では、そのような状況の中で、主イエスご自身が心を騒がせ自分を裏切る弟子がいることを予告なさいます。13章26節に「イエスは、「わたしがパン切れを浸して与えるのがその人だ」と答えられた。それから、パン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダにお与えになった。」とあり、30節で「ユダはパン切れを受け取ると、すぐ出て行った。夜であった。」と記されています。ここでいつも考えさせられるのは、食卓を囲む者たちを照らし出す光と、それと対照的に裏切り者のユダが出ていった夜の闇の深さです。先週もその強烈なコントラストを思いめぐらしながら、過ごしました。

さて、本日の聖書箇所、エフェソの信徒への手紙 5 章 6 節から 14 節を口語訳聖書で見てみますと、6 節から段落を改めることはなされていません。むしろその前の箇所とのつながりの中でとらえているという印象を受けます。それを踏まえると、新共同訳聖書では 4 章の 17 節からの「古い生き方を捨てる」ことと「新しい生き方」とを現実の生活の中で実践するにはどうしたらよいかということを、5 章 6 節から 14 節で示しているというふうに読むことができると思います。その中心に掲げられているのが 8 節の「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。」という御言葉です。私は、立川教会に来る前に、いくつかのこども園や幼稚園や保育園で聖書の話をしてきました。そこで、年間聖句や月毎の聖句を選ぶ

こともしてきました。その中で、毎年のようにこのエフェソの信徒への手紙５章８節を取り上げてきました。もちろんどこかの礼拝の中で、お子さんたちにこの御言葉の話をしてきました。多くは新学期で春のことが多かったものですから、「春が来たことを私たちに感じさせてくれるのはお日様の光です。庭のお花もその光に照らされて元気に咲いています。皆さんは、そのお日様よりももっと明るく温かで、いつも皆さんを守ってくださる神様の光に照らされているのですから、その光の子どもとして、お友達と仲良く元気に遊びましょうね。」というようなことを話したと思います。

　ところで、この8節から14節のキーワードは「光」です。「光」という言葉から私たちがすぐに思い浮かべるのは、ヨハネによる福音書8章12節の「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」と主イエス･キリストがお語りになったことかもしれません。しかし、本日の箇所で注意したいのは、主イエス・キリストが光であるということを確認しているのではなく「あなたがたは・・・光となっています。」と言われていることです。「以前には暗闇でしたが」「今は主に結ばれて」と、以前の私たちと主に結ばれている今の私たちが対比されて描き出されています。そのことは、私たちが、闇としての以前の自分を自らの力によって克服して、今の光としての自分を築き上げたということではありません。そうではなく、私たちはあくまで「主に結ばれて」光である、のです。「主に結ばれて」いなければ暗闇でしかない、そういう者が光とされているのです。私たち自身が光の源として明るく輝いているというのではなく、キリストによって「照らされ」てはじめて、私たちは光であるのです。14節の

「眠りについている者、起きよ。
死者の中から立ち上がれ。
そうすれば、キリストはあなたを照らされる。」

という引用文については、イザヤ書のいくつかの箇所が考えられますが、それらをつなぎ合わせたとも考えられています。また、当時の賛歌、更に言えば洗礼の歌の１節とも言われています。洗礼で起こることを、「キリストによって照らされること」「眠りから目覚め更に生まれ変わること」のようにとらえて洗礼を賛美し、歌っているということでしょう。洗礼は、古代の教会の人々には、そのようなものとして受け止められていたのだと思います。今や私たちは光である、洗礼によってそのような者として歩むことが許されているということを声高らかに歌っているということになります。さらに、「光の子として歩みなさい」という勧めを具体的に示しているのが 10 節です。何よりも、「何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。」と勧められています。その導き手として、光なる主イエス・キリストが私たちを照らし、魂の奥底まで明るくしてくださっているのです。

先ほどもお話ししましたが、私たちはすでに主イエス･キリストのご受難を憶える受難節を過ごしています。聖書では光の反対の闇のことを「罪」とも呼んでいます。「罪」とは端的に言えば、神に対する反抗、反逆、 神に背を向けて生きることです。具体的に考えれば、神を神として崇めず、自分を神として生きることになるのですから、神のご意志に逆らった歩みになるのです。そしてこの罪こそが 深い暗闇をこの世界にもたらせてしまったと言えるのではないでしょうか。この暗闇は目に見える世界というよりも、私たちの心の深い奥底にある暗闇と言えるかもしれません。最初は、私たちが時として抱く小さな憎しみや妬みのようなものだったかもしれません。しかし、それが膨張していって、大きな猜疑心や攻撃心や殺意まで生み出し、今世界中ではそれらが戦争や紛争という形にまで巨大化しています。そのような状況にあっては、人間の力はあまりにも微力であり、こうした暗闇から脱出することは非常に困難であることをしみじみと思い知らされています。けれども、神様は私たちをそのような世界に放置しておくことを望んではおられません。救い主イエス・キリストを十字架の出来事のために遣わすことによって人間の罪を贖われ、一人一人が光の下に生きるものと変えてくださったのです。その御業は、聖霊の働きとして今も続いています。ですから私たちは、まずはこの受難節から祈り続けるところから始めてまいりましょう。小さな祈りが、祈りを聞き続けてくださる主なる神様によって大きく膨らんでいくことを確信してまいりましょう。